

序 文

20世紀後半、科学技術は、飛躍的進歩を遂げ、人類の生活を豊かにしてきましたが、同時に環境の悪化や資源・エネルギーの枯渇等の負の遺産も残しました。今世紀は、それらの負の遺産を抑制しつつ、次の科学技術の発展を目指すことが必要であり、大学もそれに貢献することが強く望まれています。

名古屋大学工学部では、このような科学技術の発展および新しい課題に対応するために、大学院重点化を進め、「流動型大学院システム」と呼ばれる新しい教育研究組織を平成9年度に完成させました。また、それと並行して多くの研究センターを新設してきました。このように組織自体の変革はできましたが、教育研究の内容は、今後さらに継続的に充実・発展させていかななくてはなりません。また、最近、学際的な新研究科の創設、大学の法人化や統合再編、トップ30の問題等、工学研究科を取り巻く状況は非常に大きく変化してきています。これらに対応していくためには、教官が不断の努力を重ねていくことは勿論ですが、併せて高度な専門技術能力を有する技術職員の支援が不可欠です。したがって、技術職員もその専門技術能力をさらに高めるための努力を継続的に行っていくことが必要です。

本技術部技術報告書「技報」は、上記のような認識のもとに、技術職員の方々が、業務のなかで達成した技術成果の報告と、その専門技術能力を高めるための一環として自ら企画・実施した課題技術研修および学科技術研修の結果とをまとめたものです。これは、技術職員自身の努力の成果の記録であると同時に、工学研究科教官および外部にその活動内容を発信する意味も有しています。教官の方々には是非関心を持って本報告書をご覧くださいと思います。

本報告書の作成および技術研修の企画・実施に当たってご協力いただいた関係者の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2001年は、21世紀の幕開けを飾る最初の年でしたが、世界的には衝撃的な事件が多く発生し、日本では厳しい経済状況が続いてきました。また、大学は、定員削減や法人化問題等、厳しく、難しい問題を抱えています。しかし、このような厳しい状況にあるからこそ、現在は今まで以上に、個人個人が高い専門技術能力を修得することが必要です。技術職員の方々には、現在までの業務のなかでの技術研鑽や研修の成果を活かして、工学研究科の発展に尽力するとともに、引き続き組織的・個人的に自己研鑽の努力を続けてくださることを期待しています。

平成14年3月

工学研究科長・技術部長
後藤俊夫